

2006
2.21
火曜日

南日本新聞

夕刊

瀬尾 昭一郎 健康コラム 思うこと

第5回

未病

病気の診断が医療機器の進歩に従い正確度を増してきた。それにつれて、患者は検査結果に一喜一憂するようになった。悪い結果が出たとき、動かし難いものと受け止めて、時には致命的な打撃を受けることがある。

検査の精度が上がることは、治療にとつて最大の武器なのだ。武器が凶器にならぬよう、患者に対する適切な専門家の一言は大切だ。自覚症状があつても、検査結果に異常のない人もいる。心配ない結果でもつい神経質になつてしまふ。体を治す目的の薬の服用が、検査結果を上げ下

げする目先の目的にすり替わつていくように感じるのは、私だけだろうか。

「先生は検査結果ばかり見て、私の体は診てくれない」と不満を聞くことがある。

また、こんな話も耳にしたことがある。デンプン粉入りのカプセルを「これはすばらしい薬で何でも治ります」と飲ませたところ、治つてしまつたと言ふのだ。人間の持つ不思議というものだろうか。

昔は、人の五感に頼つて診察をしていた。顔色、脈、舌、腹など、本人の訴えを総合勘案して判断した。

中国最古の薬物治療書「金匱要略（きんききょうりやく）」の初めに、「上工（じょうこう）は未病（みびょう）を治す」とある。「上工」は名医、「未

病」は病気が潜んでいるものの兆候として表れていない状態をいう。名医は身体に潜む病態を発症前に探り、治療や予防をするという意味である。上工は九割の治療率を求められたという。

現代は多くの未病を早期に発見できるようになった。まず第一に生活習慣を正しくしていくことが大切である。医学の進歩とは、すみやかに未病を発見して治療するような、現代の上工を増やすことにあるのかもしれない。

